

第62回 ふるさと文庫40号の発刊にあたって

え、もう「松江市ふるさと文庫」は40号まで出たの？少し驚かれた方は、松江市ふるさと文庫ファンの方とお見受けします。

平成28年度末で松江市ふるさと文庫は19号目の発刊となるが、前身である宍道町ふるさと文庫（宍道町教育委員会刊）が21号まで続いたので、合算すると、「松江市ふるさと文庫」19（石垣と瓦から読み解く松江城：乗岡実氏著）で40号目となる計算なのだ。“合算は記録ではない”と、日米野球のような声も聞こえてきそうだが・・・。

一昔前になってしまったが、平成17年3月、旧松江市・旧八東郡内町村の合併によって新松江市が誕生した。合併に先立ち行政内では事業調整が進められ、多くは旧松江市の事業が基準となる中、「ふるさと文庫」、「歴史史料集」、「歴史叢書」は宍道町の事業を継承することとなり、合併後は松江市教育委員会から発行することとなった。この時点で、ふるさと文庫の名称は「松江市ふるさと文庫」、歴史史料集は「松江市歴史史料集」、歴史叢書は「松江市歴史叢書」と改まり、ナンバーは振出しに戻った。

松江市ふるさと文庫の第1号は、宍道・木幡家文書を素材とした小林准士先生の『お殿様の御成り』で、松江市教育委員会宍道分室で作成した。合併初年度の予算は旧市町村からの持ち寄りだったので、旧宍道町で編成した最後の予算に松江市ふるさと文庫1号を組み込み、合併後は、松江市教育委員会宍道分室長となったので、そのまま編集に携わるという「すご技」である。松江市教育長名の「初号発刊にあたって」草稿を雲南市の自宅で練る不思議さも味わった。

蛇足ながら、宍道分室長の任を終え、平成19年4月に松江市文化財課に着任すると、偶然かどうか、松江市ふるさと文庫や諸業務の他にも、「松江市歴史叢書1」の出版、松江歴史館の展示準備、松江市史の編纂準備という宿題が同時に用意されていた。とにかく忙しかったが企画・予算執行・事業の人選にも関わり、宍道町での経験を再度、一度に行うという不思議な場面設定だった。

文化財課着任後の最初のふるさと文庫は、乾隆明氏の「松江藩の財政危機を救え」で、乾さんと夜ごとメールのやり取りをし、かなり思い入れを込めて作り上げた思い出がある。とてもよく売れて、増刷も4回、計6000冊を発行し、松江市ふるさと文庫は軌道に乗った。

ここで、前身となった宍道町ふるさと文庫について、平成17年の合併直後に山陰中央新報文化欄に執筆した記事で紹介しておこう。

身近な歴史素材を住民の手に―宍道町ふるさと文庫での試み―

地域の歴史を明らかにし、歴史的資源を今と未来に活かしていくことは、住民はもとより行政にとっても重要な課題である。宍道町教育委員会（合併により松江市教育委員会）に職を得たことをきっかけに、地域史の調査と出版活動、民間歴史グループへの支援等に取り組むことができた。取り組みの一つであった「ふるさと文庫」シリーズの概要を紹介したい。

『歴史史料集』、『歴史叢書』、『宍道町史』など、旧宍道町教育委員会では住民向けの出版事業に力を注いできたが、最初に取り組んだのが「宍道町ふるさと文庫」シリーズである。教育委員会にいと、普段の活動の中から多くの情報が寄せられてくる。その情報を組織や担当者個人の中で貯えておくのではなく、積極的に住民に還元しようとしたのが最初のきっかけだった。歴代教育長にも事業の趣旨にご理解いただき、適切なアドバイスと叱咤激励をいただいた。

編集にあたっては(1)読みやすい(2)内容が正確である(3)手に入れやすいということ考えた。読みやすさは、小学校高学年以上でも読めるよう、難しい漢字や固有名詞にはできるだけルビをふるように心がけるとともに、文体は敬体をとった。手に入れやすさについては、A5サイズで50から60頁、頒布価格を500円に設定し、公共施設や書店などにも置き、希望者に販売できるよう心がけた。

今年3月までに21冊を発刊したふるさと文庫シリーズだが、最初の一冊「宍道湖の漁具・漁法」（1989年）は宍道菟古館で展示した宍道湖漁具の民俗資料集として計画していたものを、住民が手軽に読めるものにしてはという木幡修介氏（八雲本陣記念財団理事長）のアドバイスで、体裁を現在のブックレットスタイルに改めた。折りしも、宍道湖淡水化問題という地域課題と遭遇し、刷り上げた冊子が約一月で完売した思い出がある。

当初は文化財担当職員として執筆を行ったが、やがて専門の先生方に執筆をお願いし、歴史や自然など、地域の身近なテーマを題材とし、大切な内容を分かりやすく伝えることに配慮いただいた。時には誤植等の指摘もあり、編集者としての力不足を感じたが、読者からは概ね好意的に受け止めていただいたと思う。無理な注文に快く応じていただいた執筆者の方々、シリーズを支えていただいた住民の皆さん、息長く事業を見守っていただいた行政関係者には改めて感謝を申し上げたい。

さて、地域の歴史を明らかにしていく行為は、単に過去の事象を記録に留めるのみならず、歴史的背景に立脚した現在に視点をおき、地域に住む住民自らが将来を見据えるという活動を伴うところに、その重要性がある。

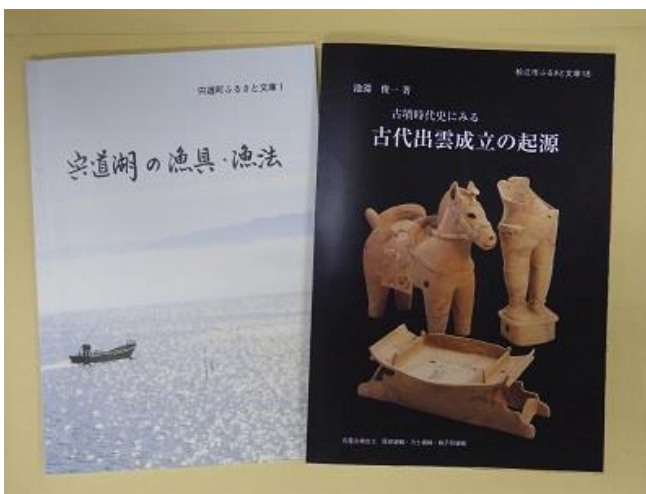
地方自治体での文化財調査活動は多くの調査素材に囲まれ、条件が整えば多様な調査活動をおこなうことができる。調査活動の成果を出版事業と結び付けることに努力を払い、啓発、基礎史料、研究発表をそれぞれシリーズ化する手法は、真の意味での地方分権が求められている今日、あらためて地域の歴史と文化の中に、地域の将来を市民とともに見出そうとする活動に極めて有益だと考える。

(松江市教育委員会宍道分室長稲田信)

松江市ふるさと文庫の理念は、宍道町ふるさと文庫と変わらない。しかし、テーマ選びには違いがある。下の表は宍道町ふるさと文庫と松江市ふるさと文庫のリストである。お気づきかもしれないが、宍道町の場合、内容は自然環境、歴史、民俗、学校での副読本と幅広いのに対し、松江市の場合、ほぼ近世、概ね松江城下町域内の歴史を中心とする内容に絞られている。題材と執筆者は時々のタイミングだが、通してみると意図が見えてくる。

宍道町では、地域素材への知識と意識の底上げが主眼であったのに対し、新松江市では、先ず、松江市の中核である城下町域での歴史に絞り、知識と意識を底上げすることが主眼だった。松江開府400年祭、松江市史編纂事業、松江城国宝化の推進、歴史館開館の動きとも連動させていた。

さて、平成29年1月刊の松江市ふるさと文庫18は、池淵俊一氏の「古墳時代史から見る古代出雲成立の起源」である。ふるさと文庫一冊一冊にはメッセージがあり、市民意識を醸成する有効な手段と考えているが、池淵氏の著作は、城下町域から古代・中世の松江へと目を向ける転換の一步である。既に『松江市史』では、考古資料を集成した史料編「考古資料」、古代・中世の文献史料を集成した史料編「古代・中世(一)」「中世(二)」、絵図類を集成した「絵図・地図」、また、通史編「自然環境・原始・古代」「中世」が揃い、『市史』に盛り込まれた最新の研究成果を市民の皆さんに分かりやすく紹介する段階に入っている。



「松江市史編纂基本計画」の行間にあるように、

『松江市史』には当初から『島根県史』に代わるものとの意識があり、史料選定にあたっては松江市域に留まらず、出雲国、松江藩領を念頭に置いている。同時に、松江市史編纂事業の様々な取り組みが、広く周辺地域に影響することも意識にある。ふるさと文庫は資料さえ整えば比較的容易に短時間で執筆でき、最近ではインターネットを利用した製本も簡単にできるようになった。ふるさと文庫→歴史史料集→歴史叢書→自治体史という、出版物を通して地域の歴史を明らかにしていく手順を踏まれば(松江市では前述のとおり平成17年合併を機に同時に始まった)、松江市行政の枠を超えて「ふるさと文庫」類の普及にも力を注ぐ段階でもある。

(平成29年2月1日 松江市史料編纂課長 稲田信)

宍道町ふるさと文庫

タイトル	著者	発刊年
1、宍道湖の漁具・漁法	稲田信	平成元年3月
2、宍道町の文化財めぐり	稲田信	平成元年11月
3、来待石の採石と加工	稲田信	平成2年3月
4、宍道町が海だったころ	高安克己	平成3年3月
5、宍道町の山城	山根正明	平成3年3月
6、宍道町の古墳時代	西尾克己	平成4年3月
7、宍道の町並みスケッチ	石富寅芳	平成7年3月
8、石と人	シホヅユムの記録	平成7年3月
9、宍道湖のおいたち	中村唯史	平成7年10月
10、宍道を訪れた旅人伝	内田文恵	平成8年3月
11、女夫岩遺跡を考える	シホヅユムの記録	平成8年10月
12、古代の道・現代の道	勝部昭、伊藤慶幸	平成9年3月
13、出雲国風土記からみた宍道町	西尾克己、丹羽野裕也	平成10年3月
14、鉄と人	石井悠	平成12年3月
15、宍道町の四季を詠む	宍道俳句会編	平成13年3月
16、ふるさと探検ブック	安部登監修、宍道町教育委員会編	平成14年3月
17、伝出雲出土銅鐸	丹羽野裕	平成15年3月

18、宍道町にお寺が出来たころ	林健亮	平成 15 年 3 月
19、白粉石・来待石の宝篋印塔、五輪塔	樋口英行	平成 16 年 3 月
20、久しくまちにし	居石由樹子	平成 16 年 9 月
21、戦国武将宍道氏とその居城	井上寛司、山根正明他	平成 17 年 3 月

松江市ふるさと文庫シリーズ

タイトル	著者	発刊年
1、お殿様の御成り	小林准士	平成 18 年 2 月
2、大根島のおいたちと洞窟生物	澤田順弘・新部一太郎・星川和夫	平成 19 年 3 月
3、松江藩の財政危機を救え	乾隆明	平成 20 年 2 月
4、堀尾吉晴と忠氏	佐々木倫朗	平成 20 年 3 月
5、城下町松江の誕生と町のしくみ	松尾寿	平成 20 年 11 月
6、堀尾吉晴-松江城への道	山根正明	平成 21 年 1 月
7、松江市の指定文化財	「松江市の指定文化財」編集委員会	平成 22 年 3 月
8、京極忠高の出雲国・松江	西島太郎	平成 22 年 2 月
9、松江城下に生きる	松原祥子	平成 22 年 3 月
10、松江市史への序章	井上寛司ほか	平成 22 年 3 月
11、松江藩校の変遷と役割	梶谷光弘	平成 22 年 6 月
12、決定版見立番付を楽しむ	乾隆明・下房俊一	平成 22 年 10 月
13、雲陽秘事記と松江藩の人々	田中則雄	平成 23 年 3 月

14、松江掃苔録	青山侑市	平成24年3月
15、中世水運と松江	長谷川博史	平成25年3月
16、松江城再発見	西和夫	平成26年8月
17、松江の碑	安部登	平成27年7月
18、古墳時代史に見る古代出雲成立の起源	池淵俊一	平成29年1月
19、石垣・瓦から読み解く松江城	乗岡実	平成29年3月